

ネットワークのなかで学ぶ

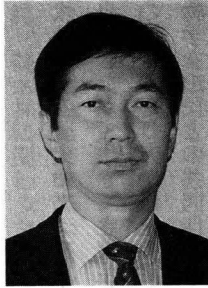
| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 明治大学 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉本, 宣 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/15785 |

ネットワークのなかで学ぶ

倉 本 宣

(くらもと・のぼる) 農学部助
教授。

一九五五年東京生まれ。東京大学理学部生物学科卒業、同大学院理学研究科博士課程中退。大学院生のときに、板橋区にある都立赤塚公園の野草（ニリンソウ）の保全活動を通して、都市の中の自然地を適正に管理することの大切さを知った。東京都庁に造園職として勤務し、公園や自然保護地の管理の実務を担当して、緑地学の世界に足を踏み入れた。一九九六年か



ら明治大学。博士（農学）。専門
は、保全生物学、緑地学、環境教
育。

現代は生命の歴史始まって以来の大量絶滅の時代である。日本では、人手の入った二次的な自然のなかで生きてきた生物の保全が重要である。二次的な自然においては、人と自然との関係のあり方が保全の鍵を握っている。生物多様性を保全するための学問である保全生物学を市民との共同作業の中で研究している者の立場から、学ぶことについて考えてみたい。

最初に、雑木林を例にして考えてみよう。雑木林には絶滅の危機にある生き物が数多く生育している。その雑木林は燃料としての薪や炭、肥料としての落ち葉を農家が持ち出すことによって成り立ってきた。一九五〇年代以降、農家を取り巻く経済構造が変化して、薪や炭や落葉は利用されなくなった。放置された雑木林からは、多くの生き物の生育基盤が失われていった。最近になって、雑木林の生物多様性保全機能が見なおされ、市民と雑

木林の関係を再構築する動きが日本各地でみられるようになってきている。雑木林の植生管理にボランティアの市民が参加し、雑木林をよみがえらせようというのである（農学部で私が担当している実習では学生に雑木林の植生管理の一部を体験してもらっている）。

雑木林ボランティアのひとりUさんは、肉体労働をしようと思って活動に参加したという。ところが、雑木林に関わるうちにUさんの興味は急速に広がっていった。落ち葉を掃けるようにするための下刈りに興味を持つと、刈った笹の利用が気になる。北海道幌加内町が笹で町おこしをしていることを知り、笹紙づくりを習いに行った。笹紙をつくってみると、和紙に興味広がっていった。また、多摩市では笹から目籠と呼ばれるざるが編まれていることを知って、目籠の会のYtさんから、編み方を教わった。笹を刈ることが雑木林の生物相を維持していることも、調査を体験して、自分の目で見る事ができた。ここでは、雑木林に関わったことがきっかけとなり、興味に興味を呼んで、Uさんの世界が無限と言ってもよいほどに広がっている。幌加内町にはYhさん、目籠の会にはYtさんがいた。興味のある事柄には、それを担う人がいて、興味のネットワークが人のネットワークを形作る。Uさんは自分の体験を「雑木林の万華鏡的世界」と表現している。

「雑木林の万華鏡的世界」は学ぶことの本質を含んでいると思う。大学で学ぶことの一つはこのようなネットワーク、特に学問のネットワークの作り方である。まず、伝統的な学問の世界においては、自分が興味を持つことがきっかけとなる。それに関連する先行研究を読み解き整理すると、その学問における問題の立て方がみえてきて、実際に研究することが可能な新たな興味をみつけたことができる。その興味はすでに解き明かされていることが多いかもしれないが、そのうちにはユニークな興味に出会えることだろう。情報のネットワークが発達した現代においては、明治大学の図書館で全国の大学図書館から文献のコピーを取り寄せることができるし、論文の著者にメールで質問をすることもできる。興味のあるメーリングリストに登録しておく、最新の情報をリアルタイムで手に入れることができる。一方、問題解決型の現代的な学問においては、現実の課題を解決するために既存の学問の領域を越えて、情報を集めなければならないだろう。例えば、カワラノギクという多摩川に生育する絶滅危惧植物を救うという課題のためには、植物生態学、植物分類学、遺伝学、花粉を運ぶ昆虫についての生態学、種子を食べる昆虫の生態学、などの生物学的な分野に加えて、河川工学、地形学、流域の歴史、気象学、市民活動論、な

どの生物学ではない分野の情報が必要である。ここでは既存の学問の体系を学ぶというよりも、解決しなければならぬ課題に対して少しでも役に立ちそうな知見を動員して、課題に応じて自分なりの学問の体系を作っていくことになる。

こうした学問のネットワークの背後には人のネットワークが存在し、興味の縁で関わった人から多くの生きた情報を学ぶことができる。人のネットワークの一員になるためには自らも情報を発信し、ネットワークの中に自分を位置づけることが有効である。メーリングリストにおいても同じことで、自分がときには情報の発信者になることで成り立っている。私の研究室では研究室ニュースを年間一〇回発行し、関連のある市民団体や行政に配布し、自らも情報の発信者になるようにしている。

大学に入学して、よい友人を作るようにという言葉も、その中に人のネットワークの重きを含んでいるように思える。未来を生きる君たちには、学内のネットワークに止まらず、市民とのネットワークを構築してほしい。市民活動の多くは、解決したい課題を抱えて、問題解決型の学問のネットワークをある程度持っていることが多い。先日、河川の環境問題のシンポジウムがあり、分科会で五人の市民の実践を聞く機会があった。彼らの話

は克明な調査に基づいており、建設的であった。しかも、学問分野でいえば、植物生態学、動物生態学、陸水学、郷土史、文学、民俗学などの多くの分野を動員して、現実の河川環境の保全に有効な方策を見いだしていた。阪神・淡路大震災の際に市民ボランティアが活躍したことが契機となり、市民と行政のパートナーシップによって多くの事業が進められるようになって、市民の能力が格段に進んでいる。かつては市民の活動の多くが理想論に走りがちであったが、現実の力を持つことによって地に足のついた活動が積み重ねられていく。私の専門の分野である生き物の保全についてみると、自分のフィールドでは職業的研究者とは異なったユニークな情報を持っている市民が増えている。問題解決型の学問を志す学生は、教員から学ぶだけでなく、フィールドに近い市民からぜひ学んでほしい。市民から得られた知見や手法の一般化や適用の限界については私たち教員が君たちに教えることになるだろう。

そして、大学を卒業したら、君たちも、フィールドを持った、能力のある市民になってほしい。そうした市民のネットワークによって成り立つ社会が現実のものとなりつつあるのだから。